

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年9月24日現在

機関番号：72601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16947

研究課題名(和文) 土器生産からみた北メソポタミア青銅器時代過渡期の考古学的研究

研究課題名(英文) The Archaeology of Transitional Phases of the Bronze Ages in Northern Mesopotamia: A View from Pottery Production

研究代表者

下釜 和也 (Shimogama, Kazuya)

(財) 古代オリエント博物館・研究部・研究員

研究者番号：70580116

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、北メソポタミア青銅器時代過渡期(紀元前2300～前1600年頃)における物質文化の様相と技術・文化関係の解明を試みた。出土土器群を技術論的に検証した結果、過渡期を挟む前後の時代の土器群には顕著な断絶がみられず、型式・様式的に連続的な展開を示すことを明らかにした。同時に土器文化からみた地域間交流に変化が生じていたことも判明した。以上の成果は、古代都市文化の衰退と社会変容は従来提唱されていたような劇的な断絶ではなく、物質文化上は緩やかな連続的变化を見せつつも、地域間関係に質的な転換をみせていたことを示す。また、その転換の実年代に地域差がある点は、古代メソポタミア社会の動態を物語る。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代文明史は、農耕牧畜の開始から文明の発生とその展開まで単純な発展史観のもとで理解されることが多い。しかし、本研究では古代文明に複数の過渡的変動期があったこと、その一つには顕著な断絶ではないが集団間関係に質的な転換があったことを、出土資料を基に考古学的に検証した。現代文明の存立基盤と持続可能性が問われるなか、古代文明の物質文化を検証することで自らを見直す一視点を提供したことに学術的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine the material culture, mainly ceramic assemblages, and its techno-cultural correlations in Early to Middle Bronze Age Northern Mesopotamia. Technological aspects observed in the ceramic evidences suggest that there are no clear discontinuities between the two periods or transitional phases, but rather a typo-stylistical continuity in the assemblages. At the same time, fundamental change in interregional interactions during the transition is also indicated by this ceramic study. This strongly illustrate that at least in terms of material culture the urbanised socio-cultural systems in ancient Mesopotamia did not see a severe upheaval or break as suggested before, but a changing patterns of ceramic entities possibly reflecting a quantitative shift in socio-political interaction spheres. In addition, the chronological timings of the shift may differ according to each macro- or micro-region, suggesting a more dynamic picture of ancient Mesopotamian communities.

研究分野：西アジア考古学

キーワード：前期青銅器時代 中期青銅器時代 シリア アナトリア 土器分析 過渡期

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

古代メソポタミアでは、前5千年紀以降、社会の複雑化、都市化を経て、文明と呼ばれる高度な社会システムを築いてきたことがよく知られている。しかし、こうした社会・文化の発展は、これまで考えられてきたように連続的に順調な発展を遂げたわけではない。近年に至るまで西アジア各地で行われてきた発掘調査の結果、むしろ、巨視的にみても微視的にみても、都市社会が成立・発展・衰退の過程を経て、頻繁に交替をくりかえしてきたことが明らかになってきた。それに伴って、従来重点的に論じられてきた文明の成立過程や起源だけではなく、そうした高度な文化や政治・社会構造の崩壊・衰退や交替、それを可能にした経済基盤・権力の基盤を詳しく考察することで人類文明のあり方を探る研究視座が注目されている。

本研究で扱った北メソポタミアという地域と関連して重要なのは、前4千年紀以降、古代都市社会が何度も「崩壊」し断絶を繰り返してきたとする見方である。特に古気候データの蓄積によって、地球規模での気候変動がその主原因であったとするモデルが1990年代から活発に議論されてきたが、これには批判も多い。

古代社会の動態や変化を外因的に捉える研究に対して、青銅器社会の過渡期の様相を扱った物質文化の考古学研究はまだかなり少なく、まだ緒についたばかりであると言わざるを得ない。近年の学界で議論となっているのは、二つの過渡期、(i)前期青銅器時代から中期青銅器時代(前3千年紀末葉～前2千年紀初頭)と、(ii)後期青銅器時代から初期鉄器時代(前2千年紀後半)にかけての時期である。いずれの時期もそれまでの農耕を基盤とする都市社会、あるいは国家機構が崩壊し、アモリ人やアラム人の席捲など遊牧民集団の役割が強調されることが多い。

前者の過渡期の場合、研究代表者が以前参加したユーフラテス川中流域の遺跡分布調査においても、青銅器時代遺跡数の推移が明瞭にみてとれ、前期青銅器時代から中期にかけて墓地造営数や集落遺跡数が激減することが判明していた。さらに、北シリア各地で発掘された遺跡では都市集落や居住層に断絶がみられたり、また分布調査によってもこの時期に集落数が減少したことが指摘されてきた。このように、考古学的現象としての社会衰退は、集落パターンの変化や都市集落の減退として捉えられることが多かった。

ところが、過渡期において、物質文化の面ではどのような変化がみられたのか。日常物資の生産活動(土器、青銅器、石器など)をはじめ様々な側面にも、上記のような集落減退や政治変動に伴って、顕著な変化や画期が見いだされるのか。そうした物質文化の分析に基づいた基礎研究はほとんど行われていない状況である。

研究代表者は、これまでに北シリア・ユーフラテス川中流域のルメイラ地区に位置するテル・アリー・アル＝ハッジ遺跡の出土資料を再整理し(古代オリエント博物館所蔵)、上記2つの過渡期のうち(i)の前期～中期青銅器時代の過渡期をまたぐ良好な資料が含まれることを明らかにしてきた。

2. 研究の目的

(1) 本研究ではテル・アリー・アル＝ハッジ(略称テル・ルメイラ)遺跡(図1,2)の出土土器を定量的に分析することによって、前・中期青銅器時代過渡期の土器群の変化を技術論的に理解することを目指した。同遺跡を含むルメイラ遺跡群は約40年前の1970年代後半、古代オリエント博物館が発掘調査を実施し、大部分の出土資料が国内に所蔵されている点で極めて稀有な資料である。本研究では、過渡期(前3千年紀後半～前2千年紀前半)における土器生産上の技術変化と実態を明らかにすることで、メソポタミア地域の物質文化に連続性がみられるかどうかを検証する。

(2) さらに、物質文化にみる変化が地域的な動態と関連していたかどうか、メソポタミア各地やアナトリアなどの周辺地域における土器群の比較と放射性炭素年代を応用し、考古事象を解釈するための編年的枠組を構築する。

(3) 最後に、物質文化(特に土器群)の観点から、青銅器時代過渡期における社会動態論に対して新たな視点から解釈モデルを提示することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) テル・アリー・アル＝ハッジ遺跡出土の前期・中期青銅器時代土器資料を、型式変化、文様装飾、製作技術などの観点から定量的に分析した。

Middle-Late Iron Age Levels IV-I (ca. 900-600? BC)
Middle Bronze Age Levels VIII-V (ca. 2000-1600 BC)
Late Early Bronze Age Levels XI-IX (ca. 2300-2000 BC)



図2 テル・ルメイラ遺跡層位断面写真と時代区分

(2) 同遺跡資料を基準として、北メソポタミ

ア～シリア、アナトリア、北西イラン地域に位置する諸遺跡と比較した。なかでも日本の調査団

が調査してきた良好な資料として、ユーフラテス川中流のビシュリー地域の青銅器時代資料、シリア東部ハブール川流域のテル・タバン遺跡出土土器群（中期～後期青銅器時代）そしてアナトリアのキュルテペ遺跡出土土器（前期～中期青銅器時代）を主な比較資料とし、過渡期の土器相を相対的に検討した。特に後者の土器群については、3(1)同様の分析手法を適用した。

(3) 同じ時間軸で考察するため、可能な限り放射性炭素年代の測定を実施して、諸遺跡間の編年構築を行った。

(4) 以上をもって明らかになった地域ごとの土器変化パターンを確認し、北メソポタミアを中心とする各土器群の変遷が、広域的な変化と同期・連動していたのかどうかを検証した。これによって、過渡期における物質文化の時空間上の変化を考察した。

4. 研究成果

(1) テル・アリー・アル＝ハッジ（ルメイラ）遺跡下層（XI～VI層、前期青銅器時代から中期青銅器時代に相当）の出土土器群を型式学・技術論的に分析した結果、前・中期過渡期段階（IX～VIII層）を含む前後の時期の土器相が漸移的に変化していたことを突き止めた（図3, 4）。器種構成や製作技法などの土器属性の点で、無文土器、灰色土器、鋳物混和土器（調理用土器か）、装飾土器の4種の分類群を区分し、それぞれの構成比及び形態において連続的な変化が確認された。型式学的には、前期青銅器時代のユーフラテス川中流域にみられる在出土器群の器種型式（鉢や壺の各型式）の多くが存続するとともに、口縁部形態や小型鉢の屈曲部形成など緩やかな変化が見受けられた。技術的側面でも、土器群、とりわけ小・中型の鉢や壺の70-80%以上は輪積・轆轤回転整形が踏襲されており、轆轤成形土器が急激に増加するような傾向も特段みられない。胎土中の混和材をみても、前期から中期にかけて土器群の顕著な粗質化は観察されなかった。

また装飾法については、前期に若干数みられたユーフラテス川以東のジャジーラ地域とシリア西部の異系統装飾土器が徐々に現れなくなること、中期以降に盛行する櫛描文・刻文系土器が次第に増加していくことなど、やはり連続的な変化を示した。櫛描文・刻文系土器は前期青銅器時代以降、北メソポタミアからシリア西部にかけて広い地理範囲に分布するが、特にルメイラの位置するユーフラテス川中流域を中心に流行をみた。境界は不分明であるが、相互に共時的な変化を示しつつも、それぞれの土器製作伝統にしたがった地域性が維持されたのではないかと想定される。

(2) 以上の土器群の全体的特徴の連続性とならんで、継承されない土器要素も特定できた。

精製の揺落彩文杯（図3-5）を含むシリア西部系の土器群は中期以降には生産されず、機能的に対応する後継型式も出現しない点は注目される。前期青銅器時代にみられたこうした精製・装

飾土器群はおそらく有力者層の飲食文化を反映した産物であると推測されよう。特に、わずか数点ではあるがこうした土器群がルメイラ遺跡のような小規模村落でも出土することは、地域間

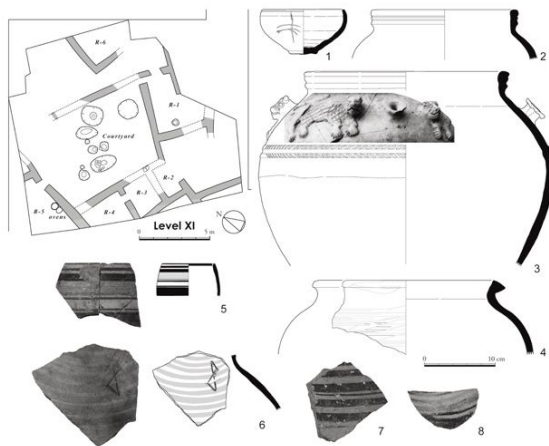


図3 ルメイラ遺跡、前期青銅器時代の遺構と出土土器群

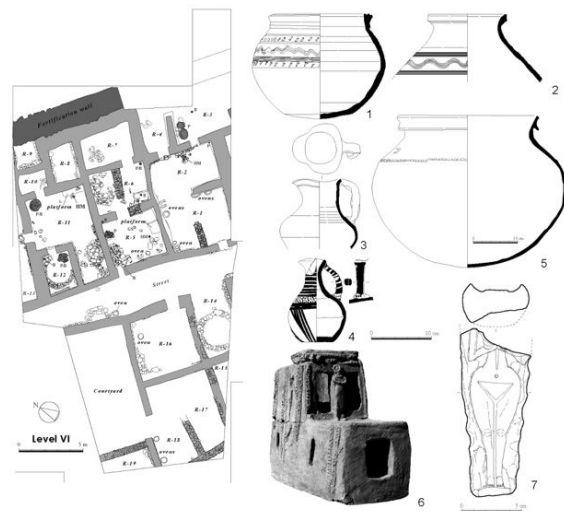


図4 ルメイラ遺跡、中期青銅器時代の遺構と出土土器群・遺物

交流という点でも、政治構造の推定という点でも意義深い。

(3) 以上の(1)(2)の資料分析から考えて、従来想定されてきたような過渡期、すなわち「社会崩壊」期における土器生産上の断絶を示すというよりも、生産組織の維持と土器型式群の通時的な変化を強く示唆する。つまり、前期青銅器時代以来の土器製作伝統が基本的に存続しながらも、独自の在出土器文化をつくりだしていったと考えられる。

一方、前時代にみられた異系統の装飾土器群が、過渡期を境に姿を消し、中期青銅器時代より後にはシリア西部系の装飾土器がごくわずかに出現することは、地域間交流の変化として理解できるだろう。その意味で、前期から中期にかけて、シリア西部・北レヴァントの交流圏へと次

第に組み込まれていった可能性が高い。このことは、粘土板文書に記された文献史料データから提起されているように、北レヴァントを実効支配していた古代エブラを中心とする古代国家構造が変質するとともに、ヤムハドや古アッシリアなど新たな政治秩序形成に至る地域文化の再編と密接に関わっていたと考えられる。

(4) 放射性炭素年代の測定と評価

テル・ルメイラ遺跡の過渡期土器群が他の遺跡のデータと、特に過渡期の実年代とどう対応しているのか評価するため、前期～中期青銅器時代に由来する炭化種子を中心に放射性炭素年代を測定した。想定以上に古い年代が出た試料を除外し、新たに信頼できる2点の年代測定値を得ることができた。これまでに得られている年代値と併せて、ルメイラ遺跡の前期・中期青銅器時代の過渡期 (IX-VIII 層) は、紀元前 2100～1950 年頃 (2 較正值) に位置付けられるという結果を得た。これは、シリア・レヴァント地域における最新の年代値データ群とも符号する (図 5)。

従来、古気候データから 4.2ka イベントとそれに関わる旧世界文明の同時衰退、政治社会変動が議論されてきたが、シリア西部では過渡期の実年代が時期的にやや遅れることが示された。最近の研究では、南レヴァント地方の前期青銅器時代における過渡期は、前 2500 年頃を示すデータが有力視されている。シリア東部では前 2200 年頃に、アナトリアでは前 2500 年頃に物質文化が変化し、前 2000 年頃にも再び物質文化的にみて画期がある (下記)。このように必ずしも地域間で連動していないことが判明する。

例えば、年間降水量が 300mm 前後を変動し、農業生産が不安定な「不確定地帯」の遺跡群 (ルメイラ遺跡含む) と、より湿潤な北レヴァント地域の都市集落とは居住動態の挙動や政治構造の変化に違いがあったことがこのような年代差となっている可能性がある。

(5) ユーフラテス川中流域の土器群 (テル・ルメイラ) の検討を基にして、他地域の土器群の検討もおこなった。中央アナトリアのキュルテペ遺跡は、前期青銅器時代から中期青銅器時代にかけて北メソポタミア・シリア地域と密接な交流関係にあったと考えられ、特に中期青銅器時代前半のアッシリア商業植民地があったことで極めて重要な拠点集落である。近年の最古層の発掘で出土した前期青銅器時代土器群を中心に比較検証を行った。

その結果、キュルテペ遺跡では IX 層にあたる紀元前 3 千年紀半ば (前 2500 年頃) に在地系の磨研土器群に加えて、外来系とみられる轆轤成整形土器群が突如として出現することが明らかとなった。無文の皿形土器など後者の土器群のなかには、形態上では前者の型式を踏襲するものもある一方、北シリア系とみられる特異な瓶形土器も IX 層に伴っていた。これは年代的には、ルメイラ遺跡に異系統土器群が搬入される前 3 千年紀後半に相当する。前段階からの土器製作伝統の要素も色濃く残すと同時に、別系統の土器伝統が併存する点は、シリア・メソポタミアでは確認できず、非常に対照的なデータである。ただし、それら新出の土器群 (またはその一部) がメソポタミア地域で製作され搬入されたものだったのか、同地域からの技術移転によって在地生産されたものか判別することはできなかった。そのためには理化学的な胎土組成分析とその統計分析を行うことが必要であって、今後の研究課題である。

(6) シリア東部 (ジャジーラ地域) に位置するテル・タバンの遺跡は、シリア西部の土器群とは文化伝統が異なっていることが判明した。上記の通り、同遺跡でも中期青銅器時代には櫛描による刻線土器が出現する。しかし、型式的にみると、ルメイラ遺跡をはじめとするシリア西部とは大きな差異がみられ、さらにハブール彩文土器という特異な装飾土器が中期青銅器時代初頭から出現するなど、土器文化伝統は東西で大きく異なっている。

さらに、前期青銅器時代にみられたような相互の文化交流も、現在の考古学データを見る限り、過渡期以降は明らかではない。その理由としてユーフラテス川を境に東西の地域で、別個の政治秩序 (ヤムハド、カトナ、古アッシリア、古バビロニアなど) が形成されたことによって、地域間交流が阻害されたことが考えられよう。これについては、まだ物質文化の検証が予備的なものに留まっており、近年調査と新資料の出土が続く北イラク地域との関係も含め今後の重点課題

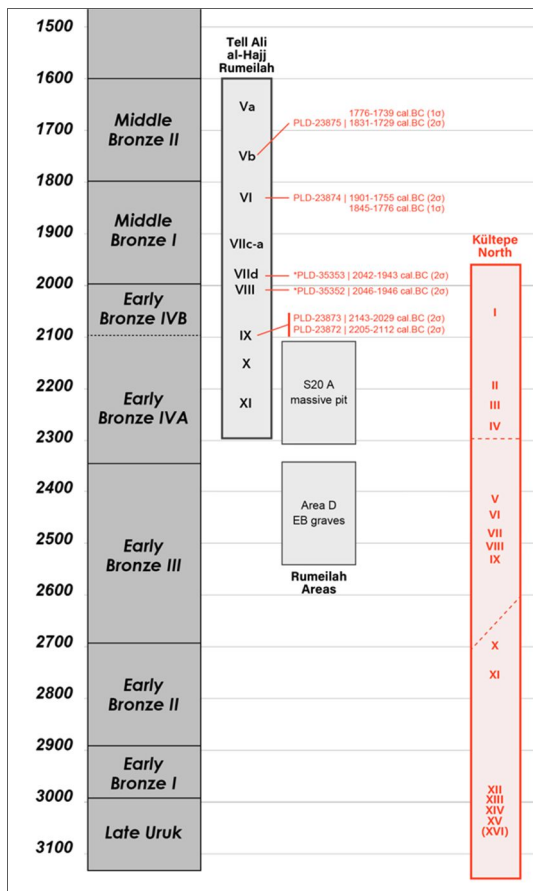


図 5 ルメイラ遺跡およびキュルテペ遺跡の層位編年比較

としたい。

(7) テル・ルメイラ集落遺跡と近隣墓地

集落遺跡の過渡期の検討と併せて、近隣の前期青銅器時代墓地の再検討も行った。同じく 40 年前の発掘調査のため、詳細な調査情報および出土資料を綿密に検討した。

副葬された土器群や青銅器類を形式的に検討した結果、これら墓地出土資料がテル・ルメイラ集落遺跡より一段階古い前期青銅器時代中頃(前 2600 ~ 前 2300 年頃)のものであることが判明した。副葬土器内に残された炭化物から 1 点だけ得られた炭素年代でも、前 2500 年頃を示す較正年代データを得た。

以上の出土品と年代から、ルメイラ集落遺跡より墓地形成時期が古いこと、墓地の年代に対応する集落遺跡が近隣に存在しないことからみて、墓地を造営した集団が牧畜民であった可能性を指摘できた。この結果によって、前期青銅器時代における北メソポタミアの地域集団には、定住せず牧畜を生業としながら遊動する集団が含まれていたこと、そうした集団が条件次第では定住村落を形成することが想定されること、おそらく彼らが地域間交流の担い手として広域での物質文化の移動に関与していた可能性が窺われる。その根拠の一つは、ルメイラ墓地出土の轆轤製小瓶や精製壺と同型式品が今回分析したアナトリアのキュルテペ遺跡でも確認されたことである。地域間交流の対象とならない在地伝統の土器群とは別に、輸送される土器の性質とその特性を評価することはこれからの研究対象となる。

(8) 総括と課題

以上、本研究では出土土器群の型式・技術論的検討と年代測定値の活用によって、北メソポタミア地域における青銅器時代過渡期の様相を再評価するための良好な物質文化データと年代値を獲得することができた。

青銅器時代過渡期の物質文化(特に土器文化伝統)は前後の時期に比べて大きな断絶があったわけではなく、全般的には連続的な展開を示すことが明らかとなった。それと同時に、一部の特殊な土器資料からは地域間交流の変遷を表徴するものがあるという示唆も得られた。物質文化に変化があった場合、その実年代を検討すると、各地域で顕著な時期差が確認できた。このことから地球規模の気候変動や地域的な政治変動とは必ずしも連動せず、物質文化の変化は個別の地域文化の政治経済的条件や技術移転に依拠していた可能性を示す。

本研究の成果をさらに広域で検証するためには、さらなる資料データの増加が不可欠である。特に、土器工房での専業生産と有力者層による管理生産、非専業的な家内生産など生産体制の違いが製作された土器群にみられるのかという問題は検討できなかった。また、新たに検討すべき土器群やそれ以外のデータ(建築遺構や遺物)、年代値の拡充、そして文献史学による編年データとの整合性など残された課題は多い。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

Kazuya Shimogama 2016 “Graves Before Settlement: the Early Bronze Age Extramural Cemetery and the Sedentary Settlement of Tell Ali al-Hajj at Rumeilah on the Syrian Middle Euphrates.” *Bulletin of the Ancient Orient Museum* XXXV: 1-29. 2016.

大津忠彦・下釜和也 「オーレル・スタインによる北西イラン踏査：調査のまなざしとイラン考古学への今日的意義」『筑紫女学園大学研究紀要』第 13 号, 71-84 頁、2018 年。

下釜和也 「西アジアにおける専業化と社会変化：論点と展望」『WASEDARILAS JOURNAL』No.5, 490-492 頁、2017 年。

〔学会発表〕(計 6 件)

Kazuya Shimogama “People and Graves Before Settlement: Pursuing Early Bronze Age Mobility at Rumeilah on the Middle Euphrates.” 11th International Congress on the Archaeology of Ancient Near East, München. 2018.

上杉彰紀・紺谷亮一・山口雄治・下釜和也・千本真生 「キュルテペ遺跡北部区域における文化変遷とアナトリアにおける社会変容」日本西アジア考古学会第 23 回総会・大会、2018 年。

堀内昌子・下釜和也・久米正吾・吉田邦夫・宮田佳樹 「前期青銅器時代のシリア Tell Rumeilah の墓群に残された土器の残留有機物分析」日本文化財学会第 34 回大会、2017 年。

下釜和也 「シリア青銅器時代のモニュメント -記憶・社会・権力-」日本西アジア考古学会第 22 回総大会学会設立 20 周年記念セッション、天理大学、2017 年。

下釜和也・山口雄治・紺谷亮一・上杉彰紀・山口莉歩 「中央アナトリア前期青銅器時代における「非在地系土器」：キュルテペ遺跡出土土器の評価をめぐって」日本西アジア考古学会第 22 回総大会、天理大学、2017 年。

Kazuya Shimogama “The Japanese Excavations at Tell Ali al-Hajj, Rumeilah, on the Euphrates:

Settlement, Material Culture, and Chronology.” *10th International Congress on the Archaeology of Ancient Near East*, Vienna. 2016.

〔図書〕(計 7 件)

Fikri Kulakoğlu, Ryoichi Kontani, Akinori Uesugi, Yuji Yamaguchi, Kazuya Shimogama, and Masao Semmoto “Preliminary Report on Excavations in the Northern Sector of Kültepe” In Cécil Michel, Fikri Kulakoğlu (eds.), *Proceedings of the 3rd Kültepe International Meeting*, Brepols Publishers, (in press).

Kazuya Shimogama “The Japanese Excavations at Tell Ali al-Hajj, Rumeilah, on the Euphrates: Settlement, Material Culture and Chronology.” In B. Horejs, Ch. Schwall, V. Müller, M. Luciani, M. Ritter, M. Giudetti, R. B. Salisbury, F. Höflmayer, and T. Bürge (eds.), *Proceedings of the 10th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, Volume 2: Excavation Reports & Summaries*, pp: 627-638. Harrassowitz Verlag. 2018.

下釜和也 「キュルテペ遺跡(古代のカネシュ)の発掘(トルコ、カイセリ県)」『ORIENTE』58号、1頁。2019年。

紺谷亮一・上杉彰紀・山口雄治・下釜和也・千本真生 「中央アナトリアにおける銅石器時代解明へ向けて -キュルテペ遺跡北トレンチ発掘調査 2017年-」『平成 29 年度考古学が語る古代オリエント 第 25 回西アジア発掘調査報告会報告集』24-28 頁、2018 年。

下釜和也 「北西イランの考古学：オーレル・スタイン卿から現代へ」『ORIENTE』56号、24-29頁。2018年。

Kazuya Shimogama “The Chalcolithic Ceramic Sequence of Telul eth-Thalathat II, Northern Iraq.” In I. Nakata, Y. Nishiaki, T. Odaka, M. Yamada and S. Yamada (eds.), *Prince of the Orient: Ancient Near Eastern Studies in Memory of H.I.H. Prince Takahito Mikasa*, pp: 1-19. Supplement to Orient. Tokyo: Journal of the Society for Near Eastern Studies in Japan. 2019.

Kazuya Shimogama “Tell Ali al-Hajj, Rumeilah (Aleppo).” In A. Tsuneki and Y. Kanjou (eds.), *A History of Syria in One Hundred Sites*, 147-150. Archaeopress. 2016.

〔その他〕一般講演会(計 5 件)

下釜和也 「古代メソポタミアの地域間交流 -シリア青銅器時代～鉄器時代の考古学研究を中心に-」国際会議「古代近東の国際社会における多様な文化」。同志社大学一神教学際研究センター。2019年。

下釜和也 「古代メソポタミア文明の実像に迫る -古代社会の崩壊と遊牧民-」岡山市立オリエント美術館 特別講演会、2018年。

下釜和也 「古代オリエントのランプ」横浜ユーラシア文化館 企画展関連講座、2018年。

下釜和也 「都市と国家の成立(銅石器時代～青銅器時代前半)」『シリアの古代史と考古学：危機に瀕する文化遺産の宝庫』朝日カルチャーセンター新宿教室、2017年。

下釜和也 「イラン北西部ウルミエ地域の古代文化」第 17 回イラン考古学セミナー。イラン・イスラーム共和国大使館、2017年。

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：下釜 和也

ローマ字氏名：SHIMOGAMA, Kazuya

所属研究機関名：古代オリエント博物館

部局名：研究部

職名：研究員

研究者番号(8桁)：70580116

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。